縣内各地版

我家の流失も顧みず

非常警戒に當つてゐる二巡査の美談

氣仙郡綾里村出身の浦生定喜巡査は地震と共に非常警戒をうけ宮古山崎安達巡査は目下釜石署で非常警戒の任に當つてゐる同君の家屋も流失家族は身をもつて避難したが浦生巡査と同様警戒の任にあたつてゐる

また上閉伊郡佐尾村出身の工藤計一氏である

一關驛前兵站部不眠不休の奮闘

全國からの救恤品配給

一關驛前に設けた本縣震災救恤兵站部では縣の鈴木技師、視察員七名が地元二關、山目、中里、狐崎、長崎、軍人及び青年團員の出動應援を求め全國から集まる救恤品の配給に不眠不休の奮闘を續けてゐるが八日は一關町内天理教信者十四名が進んで出動し本部から贈られた衣類三百梱の配給に活躍し山と積まれた救恤品も整然と配られてゆく。八日中央から贈られた配給品左の如し

▲久慈署衣類四十梱、雜貨三個、醤油二樽、菓子四貫▲音泉衣類一〇五梱、毛布二十個、バケツ二梱、醤油二樽、菓子四貫、布團七個、足袋一梱▲宮古署下駄一梱、菓子五貫▲盛署下衣類六七梱、茶一個、バケツ四梱、醤油樽、菓子四貫

×

一關驛前に駐在してゐる本縣震災救恤兵站部七日取扱つた配給品は△さかり地方味噌二樽△釜石署下味噌五十五樽慰問袋二七七個△宮古署下味噌十五樽△久慈味噌十五樽で味噌は宮城縣登米町から贈られたもの

警官救護に

京都府警察部から百五十圓

京都府警察部では今回の震災に於ける罹災警察官救護のため百五十圓を八日森部縣警察部長宛贈つた尚同府小松署でも罹災警察官救護に四十圓を寄贈したが同署長は本縣出身の工藤計一氏である

宇部村も被害甚し

久尾課長語る

縣出身の工藤計一氏である

久慈町救護本部に出張中の久尾地方課長は宇部村からの報告によつて七日同村の久喜、小袖兩濱の災狀況を視察したが其災害程度の甚だしいのに一驚して小袖濱の慘狀には全く驚いた濱の何れもが生業を失ひ皆ボンヤリして濱邊に立つてる樣は海に魚の捕なものだと語つた目下各濱共失はれた漁船、漁具の準備に苦心してゐるが小袖濱は漁船、漁具を奪はれたばかりでなく船戸を無殘に荒され船の出入は全く不可能に陥つてゐる殊に從來の船入場には十六尺立方もあらうと思はれる大きな岩その他數個の岩や障害物が漂着して船

津浪、慘死者

△唐丹村　五日正午調べ死体發見検視濟(村役場發表)

▲本郷部落　佐藤力昌　新沼トク　佐藤襄己　三浦健次　山澤鶴松　三浦義三郎　佐久間美代子　荷山寄村　阿部千代子　佐藤チヨ　寄川コン　上與造　村上庄助　エキ　葛川寄朝鮮　平野松藏　サツキ　三浦正太郎　倉又カネ　三浦吉三　人川七一郎　妻鈴木忠男　佐藤一郎　大木德三郎　小池信二　米山タツ　已代二　助鈴木カツヨ　伊藤サトヘ　伊藤將次　郎東喜　伊藤トキミ　及川マサ　木トメノ　阿部留治　上野留藏　コマツ　ヨシ　徹夫　佐々木フク　エ　晉根　永助　岡元幸　子　セツ子　猪川サン　田中兼吉　シミ　ヨシ　葛西隆　田中ヨ　リツコ　アキ　桝谷久右衛門　板橋長七　ダマエ　ミキ　清　久保市之丞　上野久米　トメコ　新沼長六　田中德　作　サトミ　鈴木喜治　四郎　千葉サダ　賀ハル　サメ　大木コモン　繁　葛西イマヨ　元木岩五　郎　佐藤カツエ　吉男　新沼アヤ子　吉田吉藏　三浦キクナ　ミノ　助治郎　伊之吉　喜助　トキ　齊藤寶

五日正午調被害總額三十六萬圓(個人分)

寫眞說明

陽災田老村全景、此の村は海上より低いと言はれ外洋に直面して何等遮るものがない、村は殆んど砂地で數石の殘つてゐるのは組合倉庫跡地ぐらゐのもので、アトの住宅は文字通り砂上の樓閣だつたと見え數石も何も殘つて居ず寫眞の如く一望荒涼たる荒野と化した

(下)　七日田老村を慰問した中村市長一行が古板でこさへた棺に納められた死者の靈を弔ふ處右から三人目中村市長、大森事務官一人おいて村久市議

罹災地出身の市内中等校生

家族の被害は相當多い

岩手中學校、罹災地出身生徒十六名中十一名は離郷してゐたが中二名は離校して居り、家族無事との報告をもたらせた、その他の離郷生よりも田の濱の昆野を除く他はそれ〳〵通知あり、これによつて見れば家屋崩壊流失は半數以上に上つてゐるが、死者は一名もなかつたと

×

東北高等女學校罹災地出身者六名の家族中、被害のあつたのは二年生の瀧野富士の流失だけでその他は全部無事

慰問品だけは徹夜してでも

關東震災の恩返しとばかり上野驛の多忙振り

「飢と寒さに泣く三陸震災の罹災者を救へ——」の聲が今や東京市にみち溢れてゐる。これは上野驛小荷物係に到著した慰問品の山である。

上野驛では去る四日以來三陸震災の慰問品無料發送を開始したが次から次とトラックで搬入される慰問品で驛員も文字通り轉手古舞ひの多忙さだ。第一日目は日蓮宗信徒の慰問品がトラック二臺で持ちこまれ、つづいて各種公共團体や宗教團体の慰問品は引きも切らぬ有樣である。そこで上野驛では旅客列車や貨車一輛を新たに增結して慰問品輸送の便宜を期してゐる。驛員の一人が關東大震災當時を回顧しながら

大正十二年の大震災には東北各地から涙ぐましい同情とお世話を頂戴した。今度はその恩返しだ。一晩や二晩は徹夜でも慰問品だけは一刻も早く災害地へ屆けたい

と語つてゐた(東京支局郵信)

縣人一丸となつて

澤藤幸治

天候に惠まれず地勢に惠まれず政治に惠まれず加ふるに陸に海に大小災害續々襲來する我岩手縣の如きは他に其比をみざるの不仕合な縣である

天候に惠まれないこと地勢に惠まれざることに就ては今迄これを抗護すべき所に抗護して天地に惠まれざるところを補ふと共に一方は災害の復興鎮止に最善萬全をつくし以て日本國土の一部である我岩手縣を其壞滅から救ひ遂に岩手縣人としてにあらず日本國民としての見地より寧々之が對策を練り勇敢に行動して其目的達成に邁進すること之が日本國民として岩手縣人に課せられた任務である、今回岩手縣海岸に起つた大災害其光景を報じた新聞の記事と寫眞は誰が涙なくして之を讀むことが出來る。之を見ることが出來ぬ。餘りにもせい慘慘惨如何にしても天地の無情をうらまずにはゐられない。

併しながら斯ふした大災害と大悲慘事は、千百年の背から、洋の東西に屢々起つたことである。我岩手縣に於て幾に三十八年目に再びこの慘害をみた而もこの大不幸事を、三度みることなくして永久の安全を期し得るや、否や我岩手縣人はこの機會に際し厳々手として大なる覺悟をなさねばならぬ。從來政治的にも殆んど縣外の地位に置かれて曾如多年數厚絶感

宗教團体の慰問品は引きも切らぬ有樣である。そこで上野驛では旅客列車や貨車一輛を新たに增結して慰問品輸送の便宜を期してゐる。驛員の一人が關東大震災當時を回顧しながら

大正十二年の大震災には東北各地から涙ぐましい同情とお世話を頂戴した。今度はその恩返しだ。一晩や二晩は徹夜でも慰問品だけは一刻も早く災害地へ屆けたい

と語つてゐた(東京支局郵信)

澤田縣議陳情

(盛石電話)釜石町出身澤田縣議は侍從の寂内役として來町した石黒知事と八日盛署の上同町の復興資金として八百九十萬圓を速急政府に要求されたき旨の陳情に及んだ

縣人一丸となつて

澤藤幸治

要せよ當面の救護に萬全を期することは、政府の誠意と社會の同情の下に代議士や縣會議員縣當局の力でも十分であるが、眞に岩手縣を根本から立て直すことは之のみの力では到底駄目である。其ことはこれまでの總べてをみても殊に最近の間題である銀行事件の有樣に徴しても明瞭である。茲に最大の力を要する縣人一丸となり生か死か其目的を達せざれば一歩も退かずの覺悟をきめた絶對の强力を要するのである。

×

岩手縣の根本的立直しは無論第一に財政問題であるそこで岩手縣として第一に要求するものは約二千萬圓の縣債その半分は災害債であるからこの分は無利子無期限にその他は年利三分以下三十年据置きに借替すること

一、國有及御料の林野全部無償拂下げ

一、河川港湾道路橋梁及耕地整理等の大工事に關する分々工事費は之を全額國庫支辯とすること

差當り以上の三大要求を貫徹す

誌上放送

「キング」四月號は創刊百號記念大増大出で素晴しい評判

1 最新大日本地圖
2 花鳥山水名畫色紙六枚
3 世界十傑肖像畫
4 結婚醫學科學的運命判斷
5 格言座右銘集

右五大附錄つき價六十錢。

縣人一丸となつて

澤藤幸治

ることに縣人一丸不斷の大努力を絶叫するものである

而してこの目的を達成する上に於て今度の災害は絶好の機會を與へたものといふべきである。世の識者に警ひを輙じて厳となすといふことがあるがかゝる大災害に遭遇するこの岩手縣人は之に打ち克つて幸福なる岩手縣を建設することは眞の岩手縣人の義務を遂行して完全に自然を征服して人間としての偉大なる力を發現する一つの大きな任務を持たせられたものと考へてみたい。

今回の災害に際して特に之等の意味を深く感ぜしめられるものである(完)

自轉車正面衝突

七日午後六時半頃西磐井郡山目村鍛冶町道街路で江刺郡岩谷堂町刀根雨傘商店々員佐藤正治(二八)

めくりで三人捕縛

六日午後五時半ころ前澤町三日町佐藤屋旅館方下座敷コタツに於て前澤町停車場通り古物商佐藤專之助(五一)横貫郡大迫町湯花商佐藤磯八(三六)膽澤郡古城村還千田伊佐(五〇)何れも假名がめくり賭博を開帳中前澤警部補派出所巡査部補、但野、小田島、鈴木の三巡査に踏み込まれて檢擧された

梵妻の出來心

西磐井郡中里村永泉寺住職光榮寺中臣光子(三二)は去る二月二日ごろ一關町守摩前で一關町大町小野寺寛代治所有の懐中金時計價格五十圓を拾得、届出でず地ま町支那人留志軒(三五)と別な懐中時計と交換し

生姜町チフテリ

市内生ケ町藤原啓七(七ツ)は七日チフテリーと決診され岩手病院に入院加療中

若者狂つて家出

一關町廣海洋服職人落合博(二〇)は八日未明無斷家出したが最近稍魂に異常を來して居り自殺の虞れあるので一關署に捜索方願ひ出た

東條綠氏夫人

千厩綠是獲糸工場長東條綠氏夫人せい子女史は五日午前十時心臟痙攣で急死せられ葬儀は七日午後五時半より同町大光寺に於て施行せらる新村盛岡、今井高田兩工場長を始め多數會葬者あり厳大を極め午後七時より同寺火葬場に於て荼毘にふしたが行年四十歳で惜まれてゐる

何れ知らぬ間に使用してゐたことこの程一關署で探知し厳しく調べの結果犯罪明瞭となつたので近く送致の筈

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。